インド建築起源論の広がりについて

18世紀後期の『アジア研究』誌にみられるインド建築観

ON THE EXTENT OF THE THEORY ON ORIGIN OF INDIAN ARCHITECTURE

The views on Indian Architecture in the magazine "The Asiatic Researches"

in the latter part of the 18th century

高松由子*, 土居義岳**

Yuko TAKAMATSU and Yoshitake DOI

The Asiatic Society (established in Calcutta in 1784) published their magazine *The Asiatic Researches* (vol. I-XX, 1788-1839). In the latter part of the 18th century, the linguist W. Chambers, the mathematician R. Burrow and the astronomer J. Goldingham presented the monographs relative to Indian Architecture to *The Asiatic Researches*. They were not the specialist in Architecture, although, at "Chambers' s monograph," there is a idea which the ruins at Mahabalipuram was built by the style of Architecture in the Ancient North India. At "Burrow' s monograph," there is a view which the architecture and the pillar in India was perceived to have the identity and the universality with those in Ancient Egypt and Europe. At "Goldingham' s monograph," there is a idea which there was the origin of cave in the Ancient India, and which the Cave at Elephanta was copied from the system of this original. At three monographs, there was the near idea of the theory on origin in the views on Indian Architecture, and this idea had been known to the members of the Society.

Keywords : the latter part of the 18th century, Asiatic Society, "The Asiatic Researches",
views on Indian Architecture, theory on origin

18世紀後期、アジア協会、『アジア研究』、インド建築観、起源論

1. 序

本稿は、18世紀後期の英国人のインド建築観のなかに、いわゆる起源論的な発想があったことを指摘しようとするものである。

著者はすでに拙稿¹⁾において、ヘースティングズ (Warren Hastings, 1732-1818, 初代ベンガル総督在任1774-85, アジア協会の会員) に捧げられた記念物を対象にしつつ、18世紀後期の英国人のインド建築観には、起源論的な発想があったことを指摘した。すなわち、当時、古代インド建築は、ときには古代ギリシア建築の起源であり、すくなくとも同等の普遍的な建築であると考えられた。本稿で起源論的とするのは、こうした発想である。

起源論的な発想に注目するのは、英国人のインド建築観にかんするこれまでの通念²⁾に、あらたな一項目を追加できる可能性があると考えられるからである。

たとえば、ファーガソン (James Fergusson, 1808-86) は「インドと東洋の建築の歴史³⁾」(1876)のなかで、古代ギリシア建築の影響を受けて、インドにおける最初の石造建築が成立したと考えた⁴⁾。しかし、起源論的な発想の持ち主たちは、インド建築にはそれ固有の起源があり、ときには、インドにヨーロッパ建築の起源があったとも考えている。すなわち、彼らのインド建築史観は、ファーガソンのそれとは異なるのである。

本稿の目的は、ファーガソンによる認識の誤りを指摘することではない。起源論的な発想の持ち主たちもまた、時代の学問水準に拘束されており、彼ら固有の誤りと偏見をもっていたと考えられる。本稿は、そうした英国人によるインド建築にたいするまなざしの歴史のなかに、ファーガソンのそれとは異なるものがあったことを指摘しようとする。

本稿では、こうした起源論的な考え方が、18世紀後期という時期にどのように発表されていたのかを検討するために、1784年にカルカッタ (現コルカタ) で設立された、アジア協会⁵⁾の会誌『アジア研究⁶⁾』(第1-20巻, 1788-1839)に掲載されたインド建築に関連した論文に注目する。そして、とくに上記のような起源論的な発想がみられる論文を抽出し、分析する。

2. アジア協会におけるインド研究の基本姿勢とその背景

18世紀後半のヨーロッパでは、本稿でいう、起源論的な歴史観が広く流布していた⁷⁾。

たとえば、「人類単一起源論⁸⁾」という、聖書の創世記に記されている人類の起原にかんする解釈である。また、サンスクリットとヨーロッパ諸言語とが共通の祖語ヤベテから分派したとする、「ヤベテ語 (Japhetic) ⁹⁾」という言語観などである。

協会でも、初代会長ジョーンズ (Sir William Jones, 1746-94, 在任

* 設計機構 由 主宰・博士(工学)

** 九州大学大学院芸術工学研究院 教授・工博

Chairman, Design Organization Yū, Dr. Eng.

Prof., Faculty of Design, Kyushu University, Dr. Eng.

1784-94) が、言語を手がかりに、人類の文化の祖型を探ろうとした¹⁰⁾。協会3周年記念講演「ヒンドゥーについて¹¹⁾」(1786)において、サンスクリットとギリシア語、ラテン語、古代ヨーロッパ諸語とが一つの源から分派したと述べた¹²⁾。いわゆる「ヤベテ語」なるものを想定した¹³⁾。このように協会におけるインド研究は、基本的に古代を対象にするもので、サンスクリット古典籍とその文学にかんする研究が中心であった¹⁴⁾。そこには、ヨーロッパ民族の起源を明らかにするという目的も含まれていた¹⁵⁾。

3. 会誌『アジア研究』に掲載されたインド建築に関連した論文
アジア協会は、歴史・考古学・美術・科学・文学など、さまざまな分野にわたるインド研究の発端的な地位を占めた¹⁶⁾。会誌『アジア研究』は、協会員が投稿した論文を、協会の会長・副会長・幹事で構成される論文委員会が選抜し、東インド会社の重役会と総督の権威下において出版された¹⁷⁾、いわば学術論文であった。

協会は「アジア協会1784-1884にかんする百年間の回顧¹⁸⁾」(1885)において、これまで会誌に掲載してきた論文を、いくつかの研究分野に分類している。

これらの論文は、3階層に項目が立てられ、分類されている。まず「考古学、歴史、文学など」と「自然科学」とに大きく分類されている。前者は、さらに「古代遺物」「硬貨」「古代インドのアルファベット」「歴史」「言語と文学」に分類されている。つぎにこの「古代遺物」は、「古代の記念物」「石窟」「彫刻」「碑文」「銅板彫刻」「奉納物」に細分されている¹⁹⁾。この「古代の記念物」あるいは「石窟」に分類された論文のなかから、インドのものを研究の対象としている論文を抽出すると、1788-99年(第1-6巻)には8論文あるが、1801-16年(第7-12巻)にはなく、1820-25年(第13-15巻)に3論文あり、1828-39年(第16-20巻)には論文はなかった²⁰⁾。

会誌を概観していえることは、18世紀後期という時期にインド建築に関連した論文を寄稿した協会員たちは、ほとんどが建築の専門家ではなかった²¹⁾、ということである。とはいえ、こうした協会員たちの研究姿勢について、協会は「回顧」において、「インドの古代遺物は、当初から協会員たちの関心を集めていたのであろう。それらは、彼らの自発的な好奇心に訴え、学問上の思索に刺激を与えるという、二重の長所をもっていた²²⁾」と記している。

それゆえ、彼らのほとんどが建築の専門家ではなかったとはいえ、彼らは、一個人の学問的な興味から、インド建築を、自らの専門分野の研究を展開するための一種の傍証として位置づけたとも考えられるのである。

1788-99年(第1-6巻)の8論文²³⁾を読んだところ、本稿でいう、起源論的な発想をもって建築遺構を論じていると認められるのは、チェンバーズ(William Chambers, -1793)の論文(第1巻, 1788)、ボロー(Reuben Burrow, 1747-92)の論文(第2巻, 1790)、ゴールドティンガム(J. Goldingham)の論文(第4巻, 1795)と判断したので、以下にその内容を分析する。

4. チェンバーズの論文(第1巻, 1788)

4-1. 論文の概要

チェンバーズは、ヒンドゥスタン地方の言語を専門とする、言語学者である。ギリシア語やラテン語だけでなく、ペルシア語を含む、6ないしは7つの東洋の言語をマスターしていた。また東インド会社の社員として、カルカッタ高等法院で通訳を勤めた²⁴⁾。

彼は、1772年と1776年に、現在でいう「マハーバリプラムの寺院群²⁵⁾」を訪れ²⁶⁾、論文「サドラスの北数マイルの場所にあり、七つのバゴダという名称によって船乗りたちに知られている、マヴァリプラムにある彫刻物と遺跡にかんするいくつかの報告書²⁷⁾」(『アジア研究』第1巻, 1788)として発表した。これは、彼がアジア協会に投稿した唯一の論文であり²⁸⁾、協会におけるインド建築研究の最初の論文でもある²⁹⁾。協会は、「古代遺物」のさらに2つの小項目「古代の記念物」と「彫刻」とに分類している³⁰⁾。

論文は、2つの異なる内容を扱っている。まず[前編³¹⁾]では、遺跡について報告されている。彼によれば、遺跡は、かつてインドとその近隣諸国とをむすぶ文化的な交流地点であった³²⁾。神話は太古の出来事を記した歴史書でもあり、ヒンドゥー神話に記されている名称や出来事を、他国の神話に記されているそれらと比較することによって、また実証的な情報源として、古代の記念物、コイン、碑文を研究することによって、インド史が解明できる³³⁾。その比較対象として、仏陀³⁴⁾の存在が着目される。そして[後編³⁵⁾]では、宣教師、歴史家、旅行者による報告書をもとに、仏陀にたいする礼拝とそれをあらわす言語とを分析しつつ、太古のインド文化の伝播が考察されている。

ただし彼は、建築の専門家ではなかったし、その論考は、あまり実証的ではない。この論文は、むしろ回想録であり³⁶⁾、遺跡の正確な実測調査³⁷⁾、建造年代の比定、図版の作成はなされていない。

会誌にインド建築に関連した論文を寄稿した協会員たちの研究姿勢については、すでに述べたとおりであるが、チェンバーズの場合は、前述のように、古代の記念物は、コインや碑文と同様、インド史を解明するうえでの実質的な情報源になると指摘しており³⁸⁾、建築遺構に史的な意義を与えたものと考えられる。

4-2. 太古のインド文化の伝播について

彼は論文の[後編]において、仏陀の存在に注目しつつ、太古のインド文化の伝播について考察している。まず、仏陀にたいする礼拝について、彼による記述を要約すると、以下のようになる。

それは、太古からインドで行なわれていた³⁹⁾。仏陀はヒンドゥーによって神として礼拝され⁴⁰⁾、信者はバゴダを礼拝した⁴¹⁾。この礼拝は、12世紀中頃にはデカン高原一帯に広がっていた⁴²⁾。それ以降は、バラモンたちが、この礼拝システムを基盤に自らの宗教を形成し、その信義を人々に浸透させた⁴³⁾。その信者は、仏陀にたいする礼拝と同様、バゴダを礼拝した⁴⁴⁾。18世紀後半のコロマンデル海岸では、このバラモンの宗教が優勢である⁴⁵⁾。とはいえセイロン(現スリランカ)、コモロ海岸近郊、シャム(現タイ)、中国では、かつてインドで行なわれていた、仏陀にたいする礼拝と同じような礼拝がみられる⁴⁶⁾。このことは、かつてインドとその近隣諸国とのあいだで文化的な交流があったことを示している⁴⁷⁾、と。

すなわち彼は、太古からインドで行なわれていた仏陀にたいする礼拝が、インドの近隣諸国に伝えられたと考えた。

つぎに、言語の伝播にかんする彼の記述を要約すると、以下のようになる。

北インドのヒンドゥーの言語は、サンスクリットである⁴⁸⁾。そこから、タミル語とバリ語⁴⁹⁾が分派した⁵⁰⁾。タミル語圏としては、コロマンデル海岸近郊、セイロン、コモロ海岸近郊である⁵¹⁾。バリ語圏としては、シャムである⁵²⁾。仏陀をあらわす用語は、サンスクリット

トのみならず、タミル語、バリ語、中国語のなかにもある⁵³⁾。また、ベンガル州にある「ベハール (Behar)」という地名から、サンスクリットでいう僧院をあらわす用語が生まれた⁵⁴⁾。この用語から、タミル語やバリ語でいう仏陀の僧院をあらわす用語が派生した⁵⁵⁾。

すなわち言語の伝播は、仏陀にたいする礼拝が、太古から北インドで行なわれていたことと、この礼拝が、マハーバリラムやインドの近隣諸国に伝播したことを裏づけるというのである。

また彼は、仏陀の存在に注目しつつ、ヨーロッパ文化について記している。彼の記述を要約すると、以下ようになる。

仏陀は、ギリシア人の神ヘルメス (Mercury) である⁵⁶⁾。仏陀の母の名前は、神ヘルメスの母の名前と似ている⁵⁷⁾。また仏陀の名前は、ゴート諸民族 (Gothic⁵⁸⁾ nations) の神ウォドン (Woden) の名前とも似ている⁵⁹⁾。サンスクリット、タミル語、バリ語でいう水曜日は、「仏陀の日」と呼ばれている⁶⁰⁾。これらの言語で呼ばれる曜日の名称は、のちに、私たちのものと同じ配列のなかで惑星の名称で呼ばれ、仏陀は水星 (Mercury) の位置におかれた⁶¹⁾。この配列のなかで、仏陀と同じ位置にあるのは、神ヘルメスである⁶²⁾。

すなわち彼は、太古の北インド文化とヨーロッパ文化とは、神々の名前において、言語的に類似するものがあると考えた⁶³⁾。

以上のことからチェンバースは、太古の北インド文化が、マハーバリラムやインドの近隣諸国に及んだという、インド文化の伝播を考えた。こうした文化の伝播を裏づけるために、仏陀の存在に注目しつつ、言語学を指標に、インドと他国との文化的な類似性を探ったのである。

4-3. 都市バーリーの廃墟としての遺跡

チェンバースは、遺跡の近郊に住むバラモンたちからの聞き取りと、自らの言語と神話にかなする知識をもって、廃墟となる以前の遺跡の本来の姿を推測し、次のように説明している。

まずバラモンたちは、彼に、都市バーリーの創建と崩壊について説明した。かつて、あるところに都市が創建され、王バーリーの治世には壮大な都市に発展したが、のちの時代に海の大波によって破壊され、それ以後再建されることはなかった⁶⁴⁾。しかし、都市バーリーの位置を記したサンスクリット碑文がある⁶⁵⁾、と。

そこからチェンバースは、次のように推測している。

神話は、太古の出来事を記した歴史書でもある⁶⁶⁾。バラモンたちによる説明は、ヒンドゥー神話がもとになっている⁶⁷⁾。バーリー⁶⁸⁾は、この神話に登場する英雄の名前である⁶⁹⁾。タミル語でいう「マハーバリラム」とは、サンスクリットでは「偉大なバーリーの都市」を意味する⁷⁰⁾。そして遺跡は、何世紀も前に崩壊した都市の廃墟である⁷¹⁾、と。

すなわち彼は、太古において創建され崩壊した都市バーリーが、実際にインドのどこかに存在し、その一部が目の前の遺跡かもしれないと推測した。

そして自らの推測を確かめるために、バラモンがいうサンスクリット碑文を翻訳し⁷²⁾、都市バーリーの位置を分析した (ただし彼は論文に、碑文の在り処やその入手方法について、記していない)。

彼によれば、碑文が示す緯度は、遺跡がたつ地点とほぼ一致する⁷³⁾。経度は一致しないが、都市は海岸からかなり離れた地点にあったと推測できる⁷⁴⁾。遺跡には、自然災害を受けた痕跡があるし⁷⁵⁾、遺跡の一部は、いま海中に沈んでいる⁷⁶⁾、と。

つまり彼は、碑文の解釈から、都市バーリーは、目の前の遺跡の位置にあったのであり、太古において創建され崩壊した、都市バーリーの廃墟の一部が、現存する遺跡だと考えた。

4-4. 遺跡にあるバゴダと原住民がいま建立しているバゴダ

彼が論文において、遺跡の建築形態について見解を記しているのは、以下の3つのバゴダだと考えられる。彼は、それらを、1枚岩を彫った彫刻作品だと考えている⁷⁷⁾。

そのうちの2つである、現在でいう「ドウラバーディー・ラタ」と「アルジュナ・ラタ」について⁷⁸⁾、以下のように記した。

それらの形態には、偉大なシンメトリーもある。にもかかわらず、バゴダ群の形態は、その地域でいま建立されている偶像寺院群⁷⁹⁾にみられる建築スタイルとは異なっている。後者は、塔がつねにピラミッド型であり、入口と屋根がアーチをもたないフラットであるという理由から、エジプト風に似ているが、これらの彫刻物群⁸⁰⁾は、頂上の1点において交差する、半円形ではなく、2つの円弧で構成された、アーチ状の屋根やドームを載せているという理由から、ゴシック趣味にほとんど等しい⁸¹⁾。

すなわち彼は、この2つのバゴダは、原住民がいま建立しているバゴダとは、全体像や、入口と屋根の形態において、建築スタイルが異なると考えた。

また彼は、現在でいう「ガネシャ・ラタ⁸²⁾」について、以下のよう記した。

頂上はアーチをなしている。そして、その建築スタイルは、彼らが形づくっているものにしがえは、頂上の部分にいま使われているいくつかの形態とは異なるものである⁸³⁾。

すなわち彼は、「ガネシャ・ラタ」には、原住民がいま建立しているバゴダとは異なる建築形態があると考えた。それは、アーチ状の切妻のヴォールト屋根を指している。「ガネシャ・ラタ」にある、アーチ状の切妻のヴォールト屋根の稜線が、ほぼ正円を描いているのにたいして、原住民がいま建立しているバゴダは、尖頭型の稜線をもつヴォールト屋根かドーム屋根を載せているというのである。

このように、彼は、遺跡にあるバゴダは、原住民がいま建立しているバゴダとは、建築スタイルが異なると考えた。

4-5. 遺跡の起源について

彼は、遺跡にあるリアルな「獅子の彫刻」に注目しつつ、この彫刻作品にも、太古の北インド文化の影響がみられると論じている。

彼は「獅子の彫刻」について、以下のよう記した。

まさに申し分なく、本物の獅子の彫刻であると観察される。また、これに名前を与える原住民たちは、ヒンドゥーの言語ではシングが⁸⁴⁾つねに獅子を意味するということを理解している。しかし、何世紀もあとの彼らの偶像寺院群のなかでその動物を象徴するために制作された形態は、同じ名前をもっているにもかかわらず、原型とはまったく似ていない歪められた怪物である。それゆえ獅子は、この地域では古くから知られていないと想定される。またシングは、ヒンドゥーの物語のなかで唯一存在する怪物に与えられた名前であると想定される。しかしその動物が、これらの作品群の作家たちによく知られているということは明白である。彼らは、美術と同様に手法において、現在のヒンドゥーたちとはおおいに異なっている⁸⁵⁾。

すなわち彼は、獅子を、本来「マハーバリラム」に生息する動

物ではないと考えた。本物の獅子を、原住民は知らないが、遺跡をつくった彫刻家たちは知っていたと判断した。原住民は、唯一ヒンドゥー神話のなかに登場する怪物として認識しているとみなした。そして、彫刻家たちがもつ美術と手法は、そもそも原住民のものではないと考えた。

彼は論文に、獅子の生息地について記していない。しかし「ヒンドゥーの言語ではシングがつねに獅子を意味する」と考えているし、他の言語からはさがしていない。また、のちの1790年に発表された、ボローによる論文「ガンダック川近郊、ハジボール地区にある、古い建造物にかんする賞書⁹⁵⁾」(『アジア研究』第2巻, 1790)には、北インドを流れるガンダキ川⁹⁶⁾(ガンジス川支流)の近郊には、「シンギアという有名な石柱が立っている⁹⁷⁾」と記されている。「シンギア」も、獅子を意味する言葉である⁹⁸⁾。このように、1790年には、英国人のあいだで獅子の石柱が有名になっていた。

つまりチェンバースは、遺跡にある彫刻作品と、現在の原住民によるそれとは、起原が異なると考えた。前者は、太古の北インドの美術と手法をもってつくられたと考えた⁹⁹⁾。

4-6. チェンバースのインド観について

彼は、仏陀の存在に注目するならば、太古の北インド(サンスクリット文化圏)文化が、マハーバリプラムやインドの近隣諸国に及んだ、という発想を抱いた。また、建築スタイルや彫刻の美術と手法に注目するならば、この太古の北インド文化が遺跡の建造にも影響を与えたと考えた。ただし論文には、太古の北インド文化とヨーロッパ文化との言語的な類似性が指摘されているが、インド文化がヨーロッパに波及したとも、その逆に、ヨーロッパ文化がインドに波及したとも、記されていない。

5. ボローの論文(第2巻, 1790)

5-1. 論文の概要

ボローは数学者である⁹⁰⁾。彼がアジア協会にインド建築に関連した論文を発表するきっかけとなったのは、ベンガルの地理調査にあった。彼は1787年に、測量技師長官コール大佐(Colonel Call, Surveyor-General)から、ベンガル州にある主要な地域の緯度と経度を天文学的に正確に定めることを懇願され、そのために、ガンジス川をネパール国境付近のハルドワール⁹¹⁾までのぼった⁹²⁾。この調査の結果そのものは、やや遅れて1795年の会誌『アジア研究』(第4巻)に発表した⁹³⁾。しかし彼は、同じ調査中に、ガンダキ川近郊にある、現在いう「ケーサリヤーのストゥーパ⁹⁴⁾」も観察しており⁹⁵⁾、1790年の会誌に、それに先んじて、論文「ガンダック川近郊、ハジボール地区にある、古い建造物にかんする賞書⁹⁶⁾」(第2巻, 1790)として報告したのである。

この論文を、協会は、「古代遺物」のさらに「古代の記念物」という小項目に分類している⁹⁷⁾。論文の[第1節⁹⁸⁾]では、ストゥーパの形態について、[第2節⁹⁹⁾]では、石柱について記されている。[第1節]と[第2節]では、インドの建築や石柱が、古代のエジプトや西ヨーロッパのそれと比較されている。[第3節¹⁰⁰⁾]では、占星術や数学の源泉と伝播について考察されており、彼独自の歴史観も展開されている。[第4節¹⁰¹⁾]では、ガンダキ川の氾濫の状況から、同時代に探究されていたナイル川の水源地¹⁰²⁾について論考されている。

ただし論文は、回想録であり¹⁰³⁾、ストゥーパの正確な実測調査

¹⁰⁴⁾、建造年代の比定、図版の作成がなされておらず、ストゥーパの形態や様式についてもあまり配慮されていない。

数学者ボローにとって、数学や天文学がおもな関心事であったようで、彼が会誌に寄稿した12編の論文は、協会の分類指標によると、「数学と物理科学」が10編、どの項目にも分類されていないのが1編、「古代遺物」が1編である¹⁰⁵⁾。また彼は、ヒンドゥーの数学について記したサンスクリット文献とペルシア語文献とを翻訳している¹⁰⁶⁾。さらに、緯度と経度を天文学的に求める方法について、詳細な説明を与えようとした(この目的は達成されなかった)¹⁰⁷⁾。

彼は、建築の専門家ではなかったが、「ストゥーパ」にかんする論文において、石柱、占星術や数学に言及しつつも、ときに数学者としての専門的な知識を活用し、建築を論じている。

5-2. ストゥーパとピラミッド型の建築について

彼は論文の[第1節]において、このストゥーパは「マハデヴァのイメージ¹⁰⁸⁾」あり、自らがインドで観察した「シヴァのイメージ¹⁰⁹⁾」のなかでも「最も大きな建造物¹¹⁰⁾」だと記している。彼は、それを巨大なリングだと考えていたのであろう。

英国人学者の多くがリングに大きな感心をよせていたが、彼らは、インドの男根崇拝のシンボルを研究し、それをギリシア・ローマのプリアポス信仰に関連づけ、その共通の起源を探究していた¹¹¹⁾。

ボローは論文において、以下のように記した。

エジプトのピラミッドは、最近アイルランドで発見されたそれらと同じように(そして、おそらくバベルの塔も)、マハデヴァのイメージとまったく同じようなものが意図されているように思える¹¹²⁾。ノーデンによって記述されたサッカラ・ピラミッドの二つは、ベンガル地方の村々で通常泥でつくられた小さなものの多くに似ている。ポコックによって描かれたタハシュールのピラミッドのひとつは、角度の鋭さを除外して、私が言及しようとするそれらほとんどと類似している。[後略]¹¹³⁾。

ここでいう「アイルランドで最近発見されたそれら」とは、ニューグレインジ¹¹⁴⁾を指していると考えられる。「ベンガル地方の村々で通常泥で造られた小さなもの」とは、西ベンガル州ヴィシヌブルに点在するラトナ型の寺院¹¹⁵⁾を指していると考えられる。

つまり彼は、インド、エジプト、アイルランドには、同じようなピラミッド型の建築がある(おそらく、聖書にある「バベルの塔」も同じピラミッド型であった)と考えた。彼は、これらの建築がつくられた意図について記していないが、ピラミッド型の建築に、太古の建築の同一性や普遍性を感じとっている。

5-3. 石柱について

彼は論文の[第2節]において、「私は、有名なシンギアの石柱が立っている、古代都市の場所から見えるかどうか思い出せない。しかし、見えるような気がする¹¹⁶⁾」と記している。

前述のように「シンギア」とは獅子を意味する言葉であり、「有名なシンギアの石柱」とは、アショーカ王石柱のことを指していると考えられる。また「古代都市」とは、ケーサリヤーとバトナの中間に位置するヴァイシャーリー¹¹⁷⁾のことを指していると考えられる。

彼は、この石柱が建てられた意図を、以下のように推測した。

[前略] シンギアの石柱は、[中略] クレオパトラの針やボローブリッジにある悪魔の掃妻と、まったく同じような宗教的な起原をもつかもしれない¹¹⁸⁾。

ここでいう「クレオパトラの針」とは、ポローの時代においては、アレキサンドリアにあった2本のオベリスクを指していると考えられる¹¹⁹⁾。「ポローブリッジにある悪魔の稲妻」とは、英国ヨーク市近郊にある古代の墳墓のまわりに立つ列柱¹²⁰⁾のことを指していると考えられる。

つまり彼は、インド、エジプト、英国には、同じような宗教的な意図をもってつくられた石柱があると推測した。石柱に、太古からの宗教の同一性や普遍性を感じとっている。

5-4. 占星術や数学の源泉と伝播について

彼は、論文を発表した1790年の会誌に、ヒンドゥーがニュートンのものと類似した微分的方式をもっていたという証拠も提示した¹²¹⁾。

このことに関連してだが、彼は、ストゥーパのそばで休息をとっているときに、原住民がゲームで遊んでいる様子を観察した¹²²⁾。そのゲームで使われた図表に、幾何学的な形態を見出した¹²³⁾。そして、占星術や数学の源泉と伝播について考察し、論文の[第3節]において、以下のように記した。

[前略]。三角形と台形の角度にかんするユークリッドの特性は、これらの著しい事例である。しかし私は、ここでの図形の使用用途を見るまで、図形がもつ真の意図に気づかした。とはいえ私は、このことを、ドルイドたちとバラモンたちが同一であるということに賛成する論拠のように思えるし、同様にもうひとつ、《トロイの城壁》と通常呼ばれているよく知られた図形が、ヒンドゥー占星術に元来使われていたということに賛成する論拠のようにも思える。とはいえ、これらの図形は、多くはより遡った源泉から生じていると思えるし、また状態にかんする分析において、ライブニッツがかすかな着想をもったものや、不定命題というユークリッドや、おそらくそれらの返還というジラルド¹²⁴⁾においても関係があると思える。正確に言えば、現代の代数が、彼らの労苦の偉大な部分が入手から入手へと転写されているという好都合な点をもっていうゆえに、ヒンドゥーたちが幾何学的に論証するための機械的な方式をもっていたと信じる理由がある。[後略]¹²⁵⁾。

つまりポローは、太古において考案されたであろう占星術や数学の理論が、ドルイドやバラモンに伝えられ、彼らからヨーロッパやインドに伝えられたと推測した。

5-5. ポローのインド観について

彼が建築や石柱の起原を、占星術や数学に関連づけて考察したと判断するには論理的に不十分であるが、彼は、占星術や数学における源泉と伝播とを、建築や石柱においても指摘しようとしたのではないだろうか。

なぜならポローの緒論は、18世紀中頃にドルイディズムを定式化させた¹²⁶⁾、ステュークリー (William Stukeley, 1687-1765) のそれとも似ているからである。

ステュークリーは、ノアの「族長の宗教¹²⁷⁾」はモーゼの登場とともに墮落したと考えられていた時代、キリスト教精神の復活を意図して、「ストーンヘンジ¹²⁸⁾」(1740)を出版した¹²⁹⁾。ドルイドを、ベルシア人のマゴス(魔術師)やインド人のギムノソピステス(裸行者)と並べて記述し、この3者から、ピュタゴラス主義者、プラトン主義者、ギリシア哲学者はその最良の知識を学んだと論じた¹³⁰⁾。

ポローは、占星術と数学において、ドルイドとバラモンが同じような文化をもっており、ドルイドの文化あるいはバラモンの文化

がギリシアのそれよりも古いと考えた。この点において、彼の見解は、ステュークリーのそれに似ている。

またポローは論文において、占星術や数学におけるのと同様に、インドの建築や石柱を、当時のドルイド研究者のあいだで存在が知られていた¹³¹⁾、西ヨーロッパの建築や石柱と比較している。

さらに論文では、占星術や数学におけるのと同様に、建築や石柱の起原にたいしても、太古の時代まで遡及して、文明の歴史的な枠組みを模索しようとする姿勢が感じられる。

以上のことから、彼は、太古のどこかで考案されたであろう、占星術や数学が、ドルイドやバラモンに伝えられ、彼らからヨーロッパやインドに伝えられた、という文明史観を描いた。こうした発想を建築や石柱にたいしても指摘しようとしたとも推測されるが、そこまでは論文に明記していない。とはいえ、インドにおけるピラミッド型の建築や宗教的な意味をもつ石柱に、太古のエジプトやヨーロッパにおけるそれらとの同一性や普遍性を感じとっている。

6. ゴールデンガムの論文(第4巻, 1795)

6-1. 論文の概要

ゴールデンガムは、天文学者であり、聖ジョージ要塞(Fort Saint George)に駐留する東インド会社の社員でもある。自らの専門分野とは別に、インドの古代遺物にも関心をもって¹³²⁾。

論文「エレファンタの島にある石窟にかんするいくつかの報告¹³³⁾」(『アジア研究』第4巻, 1795)において、現在でいう「エレファンタ第1窟¹³⁴⁾」にある、おもに彫刻物について報告した。アジア協会は、「古代遺物」のさらに「石窟」という小項目に分類している¹³⁵⁾。

エレファンタ石窟については、16世紀にインドの西海岸に入植したホルトガル人やリースホーテン(Jan Huygen van Linschoten, 1563-1611)による「東洋案内記¹³⁶⁾」(1596)によって記述されて以来、ヨーロッパでは関心がもたれていた。またバルビー(Gasparo Balbi)が、エレファンタ石窟をアレクサンダー大王が建設した古代神殿だと考えた(1590)ように、ヨーロッパ人理論家たちによって、ローマ・ギリシア神殿との類似性が指摘されてもいた¹³⁷⁾。

しかしゴールデンガムは、石窟にはインド固有の起原があると考えている。彼は、三面シヴァ胸像を描写したスケッチ(1枚)、象の彫像と石窟正面の柱を描写したスケッチ(1枚)、石窟の平面図¹³⁸⁾(1枚)を示しつつ、石窟にある彫刻物の様相を「プラーナ¹³⁹⁾」が記す神話と照合させるといふ、文献学的な視点をもちこんだ。

6-2. 石窟について

彼は、石窟内にある彫刻を、ヒンドゥーの神話と慣習をあらわしたものだと考えた¹⁴⁰⁾。また石窟内で、「プラーナ」に記されているリングを見出した¹⁴¹⁾。これらを根拠に、石窟を、ヒンドゥーが開窟した寺院であると結論づけた¹⁴²⁾。

そして石窟の開窟年代を、紀元90年頃と推測した。すなわち、

この酷評されている作りごとの年代を推論することはそれほど容易な仕事ではないが、ヒンドゥーの宗教における大分裂のあとのことであることは疑えない。それは、「プラーナ」によると、私が学んだところでは、偶然にも、天地創造にかんするわれわれの日付と同時代に当たる。それはともかく、われわれは力強い王子たちにかんする記述をもつ。彼らは、もっとのちの年代のインドのこの地方を統治した。とりわけ、建築への熱情で名高かった紀元90年¹⁴³⁾に政治を奪ったある人物について、彼による石窟の開窟

にたいして作り上げられたであろうある仮説以上に、さらに酷い数々の仮説がある。しかし、現在公開されている情報源から引き出されるにちがいないこの解明しにくいテーマについて、私は、確かな結論をもたないままに推測する¹⁴⁶⁾。

また彼は、石窟の源泉と伝播について、以下のように記した。エレファンタ石窟にかんする推論は、さまざま存在しているし、今日にいたるまでである。その起源を、エジプト人から、ユダヤ人から、あるいはアレクサンダー大王¹⁴⁵⁾からと推論を試み人々は、失礼ながら、私にはおおくの不必要な労苦を自らにかけているように思える。なおそのうえに、私は、テーマに余地のあるかぎり手短に証明しようと努める。にもかかわらず、同時に、類似した特徴がエジプト人やユダヤ人の石窟にも欠けていないということは、そのような演繹法へと導くものとして観察されるにちがいない。しかしこれらの類似点は、さらに興味深い仮説を説明するのに役立っているように私を印象づける。すなわち、これらの人々の方式が、世界のこの国で考え出されたオリジナルの複写であるということだ¹⁴⁶⁾。

つまり彼は、ヒンドゥーがエレファンタ石窟を建設したと考え、エジプト人、ユダヤ人、ギリシア人にその起源を求める、これまでの説を否定した。しかし、この石窟が、エジプト人やユダヤ人のそれと類似した特徴をもっていることも認めた。それゆえ彼は、これまでの説を逆転させ、太古のインドにおいて石窟のオリジナルがあり、その方式が、ヒンドゥー、エジプト人、ユダヤ人、ギリシア人の入植地に伝えられたという発想を思いついた。またエレファンタ石窟は、そのオリジナルの方式をもって、紀元90年頃にヒンドゥーによって開窟されたと推測した。

7. 結

18世紀後期、言語学者チェンバーズ、数学者ボロー、天文学者ゴールディングムは、アジア協会の会誌「アジア研究」に、インド建築に関連した論文を寄稿した。彼らは建築の専門家ではなかったし、彼らによるインド建築にかんする論考は、資料収集や様式概念などの点で、実証的には不十分なレベルにあった。

とはいえ「チェンバーズの論文」では、マハーバリラムの遺跡は、太古の北インドの建築スタイルや彫刻の美術と手法をもってつくられた、という考え方がみられた。「ボローの論文」では、インドにおけるピラミッド型の建築や宗教的な意図をもって立てられた石柱に、太古のエジプトやヨーロッパにおけるそれらとの同一性や普遍性を感じるとの見解がみられた。そこには、太古のどこかに建築の原型があり、この原型がヨーロッパやインドに伝えられた、という発想の存在も否定できない。そして「ゴールディングムの論文」では、太古のインドに石窟のオリジナルがあり、エレファンタ石窟はこのオリジナルの方式の複写である、という考え方がみられた。

彼らは、インド建築にはそれ固有の起源があると考えている。「ゴールディングムの論文」では、インド建築の影響がヨーロッパに及んだという発想さえみられた。

また「チェンバーズの論文」では、仏陀の存在に注目するならば、太古の北インド文化（サンスクリット文化圏）が、マーマリラムやインドの近隣諸国に伝えられた、という歴史観がみられた。太古の北インド文化とヨーロッパ文化との言語的な類似性が指摘されているが、インド文化がヨーロッパに波及したとも、その逆に、ヨーロ

ッパ文化がインドに波及したとも記されていない。「ボローの論文」では、占星術と数学に注目するならば、太古のどこかで文化の源泉があり、ここにおける文化が、ドルイドやバラモンに伝えられ、彼らからヨーロッパやインドに伝えられた、という文明史観がみられた。

彼らの発想は、ヘースティングズの考え方とも似ている。ヘースティングズは、古代インドに理想的な世界があったと考え、古代インド文化は古代ギリシア文化の源泉であり、古代インド建築は古代ギリシア建築と、すくなくとも同等の普遍的な建築であると考えた。

なお協会における活動は、ジョーンズの死（1794年4月27日）後、いったん衰退した¹⁴⁷⁾。会誌に掲載されたインド建築に関連した論文は、1800年以降、約20年間、あらわれていない¹⁴⁸⁾。

以上のことから、18世紀後期に会誌に掲載されたインド建築に関連した3論文において、協会員たちのインド建築観には、本稿でいう起源論的な発想がみられ、この発想が協会員たちに知られていたと考えられる。

[注]

凡 例

A.S. = The Asiatic Society, CENTENARY REVIEW OF THE ASIATIC SOCIETY 1784-1884, Calcutta, 1885 (Reprinted in 1986)

W.C. = William Chambers, "Some ACCOUNT of the SCULPTURES and RUINS at MAVALIPURAM, a Place a few Miles North of SADRAS, and known to Seamen by the name of the SEVEN PAGODAS", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. I, no. V, 1788, pp. 145-170

R.B. = Reuben Burrow, "Memorandums concerning An Old Building, in the Hadjipore District, near the Gunduck River, &c.", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. II, Appendix: III, 1790, pp. 477-482

J.G. = J. Goldingham, "Some account of the Cave in the Island of Elephanta", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. IV, no. XXXI, 1795, pp. 409-418

1) 「英国ハンブシャー州メルチェット・パークのヒンドゥー教寺院」『日本建築学会計画系論文集』2001年8月号、第546号、275-282頁

2) 「アジア建築研究」村松伸監修、INAX出版、1999年、64頁

3) James Fergusson, *History Of Indian And Eastern Architecture*, vol. I-IV, London, 1876

4) J. Fergusson, op. cit., pp. 51-53 J・M・マッケンジー「大英帝国のオリエンタリズム」平田雅博訳、ミネルヴァ書房、2001年、162頁

5) 1851年に「ベンガル・アジア協会 (Asiatic Society of Bengal)」と改名された (A.S., Part I, pp. 3-4)。

6) The Asiatic Society, *The Asiatic Researches*, Calcutta, vol. I-XX, 1788-1839 (vol. XVII-XX being in two parts) [another edition] London, vol. I-XX, 1799-1839 [another edition] London (printed verbatim from the Calcutta edition), vol. I-XI, 1801-12 [another edition] New Delhi, vol. I-XXIV, 1979-80

7) 「西洋美術館」小学館、1999年、786頁

8) 本稿では「人類単一起源論」という用語を、L・ポリヤコフの著書「アーリア神話」アーリア主義研究会訳、法政大学出版会、1985年の第2章の表題から引用した。「人類単一起源論」という考え方は、18世紀後半のヨーロッパにおいて比較的によく信じられていた (L・ポリヤコフ、前掲書、245頁 P・J・マーシャルとG・ウィリアムズ「野蠻の博物誌」大久保桂子訳、平凡社、1989年、177頁、179-180頁)。すなわち、人類発祥の地は、ユーフラテス河を含む4つの河に縁どられたエデンの園の東のどこかにある。現存の民族は、大洪水のあと、ノアの三人の息子セム、ハム、ヤベテから生まれた。ヨーロッパ人はヤベテから分派した。バベル以降、その子孫がそれぞれの入植地に拡散したというものである (L・ポリヤコフ、前掲書、243-244頁 松村一男「＜インディアン＞・ジョーンズ以前と以後」『現代思想』青土社、1994年6月号、115頁)。こうした歴史観から、人類の源泉を東方（創世紀にあるエデンの園の東）のインドに見い出そうとする研究や著作も多かった (L・ポリヤコフ、前掲書、249頁、253頁)。

9) 英国人パーソンズ (James Parsons) は「ヤベテの子孫—ヨーロッパ諸言語の類縁性と起源にかんする歴史的考察 (The Remains of Japhet, being historical enquiries into the affinity and origins of the European languages)」(1767)において、ヨーロッパ諸言語とインド・イランの言語との共通性を指摘し、この共通性をもつ言語を「ヤベテ語」と称した。この名称は、旧約聖書の創世紀第10章に由来する。彼は、ヨーロッパ人を「ヤベテの子孫」としてノアの直系の子孫と見なし、ノアの方舟がたどり着いたアルメニアに位置するアラト山をその起源地として確定した。またフランスでも、イエズス会修道士クルドゥー (G. L. Coccardoux) 神父がバルレミ修道院長とフランス金石文翰林院に於て書籍 (1768) において、サンスクリット、ラテン語、ギリシア語、スラブ語がいずれも一つの源泉に帰するとし、この原古の言葉を「ヤベトの言葉 (linguistique de Japhet)」と記した。そして、インド人、ギリシア人、ラテン人がその起源において血縁関係にあったと論じた (書籍の刊行は1808年) (松村一男、前掲書、114-115頁)。

10) R・H・ロウヒンズ『言語学史』中村完と後藤齊訳、研究社出版、1992年、185頁、189-191頁 11) Sir William Jones, "Discourse III. On the Hindus", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. I, no. XXV, 1788, pp. 415-432

12) W. Jones, op. cit., p. 422, l. 25-p. 423, l. 9

13) ただジョーンズは、自らが発見した諸言語の共通の源に特別な名前をつけなかった。それゆえ、この諸言語の共通の源は、英国人ヤング (Thomas Young) が「インド=ヨーロッパ語族 (Indo-European)」と提唱する (1816) まで、聖書の創世紀に由来する「ヤベテ語」という名称で呼称された (松村一男、前掲書、114-117頁、116頁)。

14) Penderel Moon, *Warren Hastings and British India*, London, 1947, p. 351

15) 中村元「比較思想論」岩波書店、1975年、10頁

- 16) P. Moon, op. cit., p. 351
 17) "Rules of The Asiatic Society", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. VI, Appendix I, 1799, p. 589, p. 593
 18) A.S.
 19) A.S., Part III, p. i アジア協会は、「古代遺物」のなかに「陶製品」や「有史以前の遺跡」という小項目も設けている。ただし、この項目に分類された論文は、The Asiatic Society (The Asiatic Society of Bengal), *The Journal*, vol. I-LII, 1832-1883に掲載されている (A.S., Part III, pp. iv-xxvi)。
 20) A.S., Part II, pp. i-iv
 21) 拙著「18世紀後期のアジア協会におけるインド建築にたいする研究姿勢」[2003年度大会(東海) 学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠] 第9265号, 529-530頁
 22) A.S., op. cit., Part II, pp. 1-2
 23) ① W.C. 分類項目「古代の記念物」と「彫刻」。② John Herbert Harington. Translated by Charles Wilkins, "On a Cave with an Inscription near Gaya", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. I, no. X, 1788, pp. 278-283 分類項目「石窟」と「碑文」。碑文を翻訳し、その内容を報告している。③ R.B. 分類項目「古代の記念物」。④ Ensign James T. Blunt, "A description of the Cutab Minar", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. IV, no. XVIII, 1795, pp. 313-316 分類項目「古代の記念物」。クトゥブ・ミナーの様相について報告している。⑤ J.G. 分類項目「石窟」。⑥ Lieutenant William Franklin, "An account of the present state of Delhi", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. IV, no. XXXII, 1795, pp. 419-432 分類項目「古代の記念物」。デリー近郊にある、いくつかのムスリム建築の様相について報告している。⑦ Colin Mackenzie, "Account of a Pagoda at Perwutumx — EXTRACT of a journal by Captain Colin Mackenzie, communicated by Major Kirkpatrick", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. V, no. XX, 1798, pp. 303-314 分類項目「古代の記念物」。南部インドのマリカルジュナ寺院の様相、礼拝の対象、礼拝の様相について報告している。⑧ Sir C. W. Malet, "DESCRIPTION of the Caves or Excavations, on the mountain, about a mile to the eastward of the town of Ellora, or as called on the spot Verrool, though therein there appears inaccuracy, as the foundation of the town is attributed to Yelloo, or Ello rajah, whose capital is said to have been Ellichpore", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. VI, no. X, 1799, pp. 389-424 分類項目「石窟」と「彫刻」。エローラ石窟にかんする考古学的な調査報告である。
 これら8論文、起源論的な発想がみられるのは3論文(①③⑤)であると考えられる。
 24) Sir Leslie Stephen and Sir Sidney Lee, *The Dictionary of national biography founded in 1882 by George Smith*, Oxford University Press, 1917, vol. IV, p. 22, p. 29 O. P. Kejariwal, *The Asiatic Society of Bengal and the Discovery of India's Past 1784-1838*, Delhi, Oxford University Press, 1988, p. 242 footnote 35 またチェンバースは、アジア協会の設立集会(1784年1月15日)において協会員となった (A.S., Part I, p. 3 footnote, Part II, pp. 2-3)。
 25) Temples at Mahabalipuram (Mamallapuram)
 26) W.C., p. 145, 1. 6-22
 27) W.C.
 28) A.S., Part II, pp. i-xxxiv
 29) O. P. Kejariwal, op. cit., p. 38
 30) A.S., Part II, pp. i-xxxiv
 31) W.C., p. 145, 1. 6-p. 158, 1. 17
 32) W.C., p. 152, 1. 3-12 W.C., p. 158, 1. 18-28
 33) W.C., p. 157, 1. 13-p. 158, 1. 3
 34) 18世紀のヨーロッパ人歴史家やキリスト教宣教師たちは、仏陀にたいする礼拝がインドに発祥したと考えていた。この礼拝が、チベットのラマ教から東南アジアの上座部まできわめて多様な形態をとっていることや、仏陀が各地でさまざまな名前前で呼ばれていることも知っていた。しかし、何人の仏陀がいつ頃存在したのかについては、明らかにできないまでもあった。彼らのなかには、仏陀を、ヴィシュヌの化身の一つとみなす者もいた (P. J. マーシャルと G. ウィリアムズ, 前掲書, 169-170頁)。
 35) W.C., p. 158, 1. 18-p. 170, 1. 10
 36) 37) W.C., p. 145, 1. 14-22
 38) W.C., p. 157, 1. 24-p. 158, 1. 3
 39) W.C., p. 163, 1. 8-13 W.C., p. 165, 1. 21-p. 164, 1. 3 W.C., p. 170, 1. 3
 40) W.C., p. 168, 1. 7-9
 41) W.C., p. 164, 1. 17-19
 42) W.C., p. 166, 1. 7-p. 167, 1. 4
 43) W.C., p. 167, 1. 4-10 W.C., p. 168, 1. 10-26
 44) W.C., p. 164, 1. 11-21
 45) W.C., p. 146, 1. 3-7 W.C., p. 158, 1. 22-28 W.C., p. 168, 1. 17-p. 169, 1. 3
 46) セイロンにかんする記述は、W.C., p. 161, 1. 14-p. 162, 1. 4 W.C., p. 164, 1. 11-p. 166, 1. 6
 コモロ海岸近郊にかんする記述は、W.C., p. 159, 1. 9-18
 シャムにかんする記述は、W.C., p. 158, 1. 25-27 W.C., p. 161, 1. 8-p. 162, 1. 15
 W.C., p. 163, 1. 14-p. 164, 1. 13
 中国にかんする記述は、W.C., p. 170, 1. 1-6
 47) W.C., p. 158, 1. 18-28
 48) W.C., p. 146, 1. 20
 49) Baric チベット・ビルマ諸語 (Tibeto-Burman) 一北東インド、チベット・ビルマ語系 (North-eastern India) — サル語群 (Sal) — バリ語系 (Baric) の系統図に該当する言語。現在の言語学の知識では、バリ語系言語は、インド北東部の平原と東部の広大な山地に分布する (R. E. アシャーと Ch. モーズリー「世界民族言語地図」福井正子訳、土田滋と福井勝義監修、東洋書林、2000年、151頁、158頁、170頁)。
 50) W.C., p. 146, 1. 23-24 W.C., p. 147, 1. 1-6 W.C., p. 158, 1. 24-25
 W.C., p. 160, 1. 3-4 W.C., p. 160, 1. 9-19
 51) コロマンデル海岸近郊の言語にかんする記述は、W.C., p. 146, 1. 17-19
 セイロンの言語にかんする記述は、W.C., p. 147, 1. 3-4
 コモロ海岸近郊の言語にかんする記述は、W.C., p. 160, 1. 1-2
 52) W.C., p. 159, 1. 3-5
 53) サンスクリット、タミル語、バリ語にかんする記述は、W.C., p. 160, 1. 20-p. 163, 1. 5
 中国語にかんする記述は、W.C., p. 170, 1. 2-6
 54) W.C., p. 163, 1. 8-13
 55) タミル語にかんする記述は、W.C., p. 168, 1. 4-7
 バリ語にかんする記述は、W.C., p. 163, 1. 6-8
 56) W.C., p. 162, 1. 21-23
 57) W.C., p. 162, 1. 23-p. 163, 1. 1
 58) 「ゴシック (英語 gothic, 仏語 gothique, 独語 Goutik)」という用語は、ルネサンス期のイタリア文化人たちが用いた、イタリア語「gotico (ゴート人の)」に由来する。彼らにとってゴート人とは、ゲルマン民族 (またはアルプス以北でドイツ語を話す人々) の代理名称であった。この見方は、のちの17・18世紀の英国人のあいだにも浸透した。そして英国では、「サクソン人=ゲルマン民族=ゴート人」という大雑把な等号関係が成立することになった (酒井健「ゴシックとは何か」講談社現代新書、200年、156-159頁)。
 59) W.C., p. 162, 1. 21-p. 163, 1. 3 60) W.C., p. 162, 1. 15-17
 61) W.C., p. 162, 1. 18-21 62) W.C., p. 163, 1. 3-5
 63) ただし「チェンバースの論文」には、太古の北インド文化がヨーロッパに波及したとも、その逆に、ヨーロッパ文化が北インドに波及したとも記されていない。
 64) W.C., p. 154, 1. 14-p. 155, 1. 12 W.C., p. 156, 1. 2-p. 157, 1. 10
 65) W.C., p. 155, 1. 12-13
 66) W.C., p. 157, 1. 13-p. 158, 1. 3
 67) W.C., p. 154, 1. 7-13
 68) ヒンドゥー神話に登場するダイティヤの王、「マハーバリ」とも呼ばれている。神話では、ヴィシュヌの第4の化身と対面する (『インド神伝説辞典』菅沼晃編、東京堂出版、1990年、262頁)。
 69) W.C., p. 147, 1. 1-3
 70) W.C., p. 146, 1. 17-21
 71) W.C., p. 145, 1. 23-p. 146, 1. 1 W.C., p. 147, 1. 13-16
 72) チェンバースは、このサンスクリット碑文を、以下のように翻訳した。
 ガンジスの南方から200 Yojen,
 東方の海から西に向かって5 Yojen (W.C., p. 155, 1. 17-18)。
 73) 74) W.C., p. 155 footnote
 75) W.C., p. 154, 1. 3-13
 76) W.C., p. 146, 1. 12-16 W.C., p. 153, 1. 12-24
 77) W.C., p. 147, 1. 19-20 W.C., p. 150, 1. 22-24
 78) チェンバースは論文において、2つのパゴダが、「丘より南方へ約1.5mileの距離にみられる (W.C., p. 150, 1. 20-22)」と記している。それゆえ、この2つのパゴダは、現在でいう「五つのラタ」のうちのどれかであると推察される。また彼は論文において、「それらは、2つのパゴダから構成されている (W.C., p. 150, 1. 22)。各々は、それぞれひとつの単一の岩からなる (W.C., p. 150, 1. 24)。これらの近くにも、各々がひとつの石から切断された、しかしとてもじょうずに製作された、実物大のふくくらとした象と、実物大よりもかなり大きな獅子が立っている (W.C., p. 150, 1. 25-p. 151, 1. 1)」と記している。「五つのラタ」には、象の彫刻と獅子の彫刻のそばに、現在でいう「アルジュナ・ラタ (Arjuna ratha)」と「ドラウパディー・ラタ (Draupadi ratha)」がある。しかも、この2つのパゴダは、他の3つパゴダとは異なり、同一の基壇の上になっている。
 それゆえ、論文で報告されている2つのパゴダは、「ドラウパディー・ラタ」と「アルジュナ・ラタ」を指していると考えられる。
 79) チェンバースは論文において、原住民がいま建立している偶像寺院群について、具体的な建築名を記していない。しかし、18世紀以降のマハーバリプラム近郊において新築、増改築された寺院には、タンジョールのプリシュ・ブリハデーシュワラ寺院 (増改築1777) や、マドラーの大寺院などがある (村田治郎「建築学大系4-4I (東洋建築史)」彰国社、1979年、140-141頁)。これらは、いずれも高塔型のゴブラからなり、頂部には、円筒形のヴォールト状の屋根、または八角形のドーム状の屋根を載せている (J. ミッチェル「ヒンドゥー教の建築」神谷武夫訳、鹿島出版会、1993年、203頁、211頁)。
 80) これらの彫刻物群 (these sculptures) は、後者 (The latter) の彫刻物群を指している。
 81) There is also great symmetry in their form, though that of the Pagodas is different from the style of architecture, according to which idol temples are now built in that country. The latter resembles the Egyptian, for the towers are always pyramidal, and the gates and roofs flat and without arches, but these sculptures approach nearer to the Gothic taste, being surmounted by arched roofs or domes that are not semicircular but composed of two segments of circles meeting in a point at top. (W.C., p. 151, 1. 10-17)
 82) チェンバースは論文において、このパゴダが、「海に面する側の丘の最も低い位置まで進むと、ひとつのものがんじょうな石の地盤からそびえたつ、ひとつのパゴダがある (W.C., p. 147, 1. 17-18)」と記している。そして、その場所から「少し離れた距離にある (W.C., p. 148, 1. 2)」、現在でいう「岩壁彫刻」について報告している (W.C., p. 148, 1. 2-15)。
 それゆえ、論文で報告されているこのパゴダは、「ガネシャ・ラタ (Ganesha Ratha)」を指していると考えられる。
 83) The top is arched, and the style of architecture according to which it is formed different from any now used in those parts. (W.C., p. 148, 1. 1-2)
 84) It is also observable that the lion in this group of sculptures, as well as that upon the stone couch above mentioned, are perfectly just representations of the true lion, and the natives there give them the name, which is always understood to mean a lion in the Hindoo language, to wit, Sing; but the figure which they have made to represent that animal in their idol temples for centuries past, though it bears the same appellation, is a distorted monster totally unlike the original; inasmuch that it has from hence been supposed, that the lion was not antiently known in this country, and that Sing was a name given to a monster, that existed only in Hindoo romance. But it is plain that animal was well known to the authors of these works, who in manners as well as arts seem to have differed much from the modern Hindoos. (W.C., p. 151, 1. 17-28)
 85) R.B.
 86) Gadak ガンジス川の支流 (24-28° N, 84-86° E)。現在のネパール国境付近からビハール州パトナ (Patna) まで流れている (『世界大地図帳』平凡社、1993年、34-35頁)。
 87) R.B., p. 478, 1. 23-p. 479, 1. 8
 88) 「南アジアを知る辞典」辛島昇とその他9名監修、平凡社、1992年 J. Goldingham, "Some account of the Sculptures at Mahabalipuram, usually called the Seven Pagodas", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. IV, no. IV, 1795, p. 73, 1. 22
 89) ただし「チェンバースの論文」には、太古の北インドの建築や彫刻の影響がヨーロッパに波及したとも、その逆に、太古のヨーロッパの建築や彫刻の影響が北インドに波及したとも記されていない。
 90) L. Stephen and S. Lee, op. cit., vol. XII, p. 448-449 またボローは、アジア協会の設立集会において協会員となった (A.S., Part I, p. 3 footnote A.S., Part II, pp. 2-3)。
 91) Herdwar ガンジス川上流に位置する、ヒンドゥーの四大聖地の一つである (『ヒンドゥー教の本』少年社と福士寿と佐々木勝編、学習研究社、1995年、174-175頁)。
 92) A.S., Part III, p. 2, 1. 12-17
 93) Reuben Burrow, "Table of Latitudes and Longitudes of some principal places in India, determined from astronomical observations", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. IV, no. XXI, 1795, pp. 325-330
 94) Su'pa at Ke'sariya Moti'ha'ri から Chhapra への道を東方に進むと Kesariya に着く。ここから南西2 mileの位置に遺構がある。遺構は、仏教徒のためのストゥーパである。1861-62年に土手が発掘されたとき、東側にいくつかの小室と仏陀の胸像を入れた型骨箱が発見された。1881年、カニンガム (Alexander Cunningham, 1814-93) は、このストゥーパを調査し、その建造年代を紀元200-700年と比定した。彼の測量結果によると、直径68feetとSinch、高さ51feetと6inch、その下にある大きな土手は、高さ63feet、基礎の円周1,400feet、ストゥーパは煉瓦積みである。このとき、(南側頂部の数ヶ所を除いて) 煉瓦が掘り出されていたし、仏陀の彫像も消失していた。遺構は密林のなかにあり、彼の測量結果を確認することはできない (Maulvi Muhammad Hamid Kuraishi, *Archaeological survey of India: new imperial series—List of ancient monuments protected under Act VII of 1904 in the province of Bihar and Orissa*, Eastern Book House (Patna, Bihar), vol. 51, 1931, pp. 3-5)。

本稿は「ボローの論文」で報告された遺構を、以下のような理由から、現在でいう「ケサリヤーのストゥーパ」と比定した。まず論文は、遺構の所在地を、「Hadjipore 地区 (R.B., p. 477-1. 5), Kessereab と呼ばれる場所の近郊にある Gunduck 川の支流 2 日の旅にあり、川の支流と下流の適当な距離から見える位置にあったであろう (R.B., p. 477, 1. 18-p. 478, 1. 5)。また、Singeah という有名な石柱が立つ古代の都市から肉眼で見える位置にあったであろう (R.B., p. 478, 1. 23-p. 479, 1. 8)。この遺構を発見する少し前に、私は、川のかなり上流のネパール国境付近にいた (R.B., p. 480, 1. 16-17, 1. 24-25)」と記している。現在、ビハール州パトナ市からガンダキ川の上流約 10km の地点にバジプール (Hajipur) 市がある。また古都クシナガル (カシヤ、現在のゴラクプル市の東にあつたと考えられている) の近郊にガンダキ川が位置する (『世界大図報』平凡社、1993 年、34-35 頁)。それゆえ遺構は、現在のビハール州パトナからネパール国境付近まで流れている、ガンダキ川の近郊にあると考えられる。

そして論文は、遺構の形態を (その実測結果は正確なものではないが)、「円錐形の胴部の上に円筒をもつ。現在、円筒の頭部は崩壊している。円筒の直径 64 feet、高さ 65 feet、円筒が据えられている円錐形の柱筒の高さ 93 feet。基礎となる円錐形の直径 363 feet。円錐形と円筒とは煉瓦造である。円筒の内部が空洞でありそうな様子はまったくなかった (R.B., p. 478, 1. 6-22)」と記している。それゆえ遺構は、煉瓦造であり、広大な円錐形の基礎の上にたつ円筒形の構築物をもつものであると考えられる。

95) R.B., p. 480, 1. 14-p. 481, 1. 4 96) R.B.

97) A.S., Part II, pp. i-xxxiv

98) R.B., p. 477, 1. 6-p. 478, 1. 22 99) R.B., p. 478, 1. 23-p. 479, 1. 11

100) R.B., p. 479, 1. 12-p. 480, 1. 13 101) R.B., p. 480, 1. 14-p. 481, 1. 7

102) プトレマイオス (Ptolemaios Klaudios, 100 頃-170 頃) は『地理学入門』(全 8 巻)において、ナイル川の水源は「月の山脈 (Lunae montes)」の頂にある雪解け水に端を発すると記した。18 世紀末のヨーロッパ人探検家たちは、プトレマイオスの記述をもとに、ナイル川の水源を探索した。この調査のためにアフリカ協会が設立された (1788, ロンドン) (A・ユゴン『アフリカ大陸探検史』高野優記、堀信行監修、朝元社、134 頁、136 頁)。

103) R.B., p. 478, 1. 23-24 R.B., p. 479, 1. 12-14

104) R.B., p. 478, 1. 6-12

105) A.S., Part II, pp. i-ciii A.S., Part III, pp. i-lxxxvii

106) L. Stephen and S. Lee, op. cit., vol. XII, p. 449

107) A.S., Part III, p. 2, p. 22

108) R.B., p. 478, 1. 8 109) R.B., p. 478, 1. 16 110) R.B., p. 478, 1. 18

111) Mildred Archer, *The Picturesque Journeys Of Thomas And William Daniell 1786-94*, London, 1980, p. 127

112) The pyramids of Egypt as well as those lately discovered in Ireland (and probably too the Tower of Babel), seem to have been intended for nothing more than images of Mahadeo. (R.B., p. 477, 1. 6-8)

113) Two of the Sakkara pyramids described by Norden, are like many of the small ones usually built of mud, in the villages of Bengal: one of the pyramids of Dashour drawn by Pocock, is nearly similar to that I am going to mention, except in the acuteness of the angle: most of the Pagodas of the Carnatic are either complete or truncated pyramids; and an old Stone Building without any cavity, which I saw in Yambeah, near the Catubed river on the Aracan Coast; differed so little from a pyramid that I did not suspect it was meant for the image of Seeva, till I was told it by the natives. (R.B., p. 477, 1. 9-17)

114) アイルランドのタラにある、直径約 100M のピラミッド型の古代の墳墓である。18 世紀中頃には、ドルイド研究者や古物研究家協会によって、その存在が知られていた (G・タニエルと C・レンブル『先史の叢書』富井真訳、真陽社、2001 年、19-21 頁)。

115) 神谷武夫『インドの建築』東方出版、1996 年、75 頁

116) R.B., p. 478, 1. 23-p. 479, 1. 1

117) Vaisa li 現在その遺構は、ガンジス川を隔てたパトナーの北方約 30km のバサル (Basahr) 村に比定されている (『南アジアを知る辞典』79 頁)。

118) I do not recollect whether it be visible from the site of the ancient city where the famous pillar of Singeah stands, or not; but have a faint idea that it is; what the intention of these extraordinary columns may have been originally, is perhaps not so easy to tell: at first sight it would seem that they were for holding inscriptions, because those of Betiah, Dehli, and Hiahabad, have inscriptions, (though in a character that has not been yet deciphered); but the pillar of Singeah seems to have none whatever, for some Bramins told me they attended at the time it was dug to the foundation, near twenty feet under ground, by a gentleman o Patna, who had hopes to have found some treasures; and that there was not the least vestige of any inscription upon it. Probably those pillars; Cleopatra's needle, and the Devil's bolts at Boroughbridge, may all have the same religious origin. (R.B., p. 478, 1. 23-p. 479, 1. 11)

119) 紀元前 1467 年頃にトメス 3 世によってエジプトのヘリオポリスの太陽神殿に (トメス 3 世の第 3 回即位記念祭を祝して) 奉納され、のちの紀元前 10 年頃にアウグストゥス帝によってアレキサンドリアのゼーザリウム神殿の正面に移設された、2 本のオベリスクを指す (L・ハバシュ『エジプトのオベリスク』吉村作治訳、六興出版、1983 年、193-196 頁)。この 2 本のオベリスクは、1878 年にロンドン (テムズ川河畔) に、1881 年にニューヨーク (セントラルパーク) に移設された (L・ハバシュ、前掲書、206 頁、213 頁)。

「クレオパトラの針」の様相については、12 世紀中頃にはアラブ人地理学者によって、16 世紀中頃にはヨーロッパ人旅行者によって、報告されていた (佐原六郎『塔の研究』永見社、1949 年、214-215 頁)。この 2 本のオベリスクが「クレオパトラの針」と呼ばれるようになった理由は明らかではないが、すくなくとも 12 世紀末以降のヨーロッパ人は、「オベリスク」を「ファラオの針」と呼んでいた。また、アレキサンドリアに移設された 2 本のオベリスクを「ファラオの針」と呼ばずして、「クレオパトラの針」と呼ばれるようになった理由は、クレオパトラが 2 本のオベリスクをアレキサンドリアに再建させたからなど、いくつかの説がある。しかし真相は、不明である (佐原六郎、前掲書、217-218 頁)。この 2 本のオベリスクを「クレオパトラの針」と呼んだ学者には、Paul, Lucas, Norden, Baron de Tott, Lepsius, Schnease, Sharpe, Long などがある (佐原六郎、前掲書、214-217 頁)。ボローは論文において、「ノーデンによって記述されたサッカラ・ピラミッドの二つは (R.B., p. 477, 1. 9)」と記している。彼は、ノーデンの著書から「クレオパトラの針」を知ったものと考えられる。

120) Boroughbridge (54.05° N, 1.24° W) は、英国ヨークシャー州ヨーク市近郊に位置する (The Times Atlas of the World, vol. II, London, 1955, Map. 57)。ヨーク市近郊には古代の墳墓や石柱が点在している (ミランダ・J・グリーン『図説ドーランド』井上君江監修、大田健訳、東京書籍、2000 年、98 頁)。また「悪魔の稲妻」とは、中世の正当派キリスト教徒が、地に下る雷とサタン像のイメージとを結びつけたことから、「蛇」または「龍」を意味するようになった (不二龍彦『キリスト教の本 (下)』増田秀光編、学研、1996 年、84-85 頁)。そして 18 世紀のドルイド研究者は、英国に点在する古代のピラミッド型の墳墓にまわりに立つ列柱を「蛇」または「龍」と呼び、その中心に立つ 1 本の石柱を「オベリスク」と呼んでいた (吉村正和『フリーメイソンと鎌倉』人文書館、1998 年、210 頁図 4 の注記)。

121) この証拠は、Reuben Burrow, "A Proof that the Hindoos had the Binomial Theorem", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. II, Appendix: V, 1790, pp. 487-497 において提示された (A.S., Part III, p. 22)。

122) R.B., p. 479, 1. 12-15

123) R.B., p. 479, 1. 15-26

124) Gerard (Gaspard) Desargues, 1593-1662 フランスの建築家・数学者。射影幾何学の基礎を作った (『科学者人名事典』科学者人名事典編集委員会編、丸善、1997 年)。

125) Perhaps the connection of time and place may apologize for the diversity of the subject, in mentioning, that while I sat under the shade of a large tree near the pyramid on account of the sultry heat; some of the people of the adjacent village came and played there with Cowries, on a diagram, that was formed by placing five points in a circular order, and joining every pair of alternate points by a line, which formed a kind of pentagon; this brought to my recollection a circumstance told me by a gentleman in England; that an old piece of silver plate had been dug out of the earth with such a figure upon it; the use of it was totally unknown, as well as the age; and I was desired to find what geometrical properties; the figure possessed; one I remember was, that if any number of points joined; then the sum of all the salient angles of the figure would be equal to four right angles when the number was even. Euclid's properties of the angles of the triangle and trapezium are particular cases of these; but I had no suspicion of the real intention of the figure till I saw the use here made of it. I seems however an argument in favour of the identity of the Druids and Bramins, as well as another well known diagram usually called the "Walls of Troy", which was used originally in the Hindoo astrology; these figures however appear to have flowed from a much higher source, and to have relation to what Leibnitz had a distant idea of, in his analysis of situation, Euclid in his Porisms, and Girard perhaps in his restitution of them: in fact, as the modern Algebraists have the advantage of transferring a great part of their labour from the head to the hands, so there is reason to believe that the Hindoos had mechanical methods of reasoning geometrically, much more extensive than the elementary methods made use of at present, and that even their games were deduced from, and intended perhaps to be examples of them: but this deserves to be treated more at length elsewhere. (R.B., p. 479, 1. 12-p. 480, 1. 13)

126) 吉村正和、前掲書、192-193 頁

127) モーセ以前のイスラエルの祖先たちによる宗教である。直接的には、ノアからアブラハムにいたる人々の宗教を指す (吉村正和、前掲書、196-197 頁)。

128) William Stukeley, *Stonehenge: A Temple Restored to the British Druids*, London, 1740

129) 吉村正和、前掲書、192-197 頁

130) 吉村正和、前掲書、197 頁注記

131) 注 114)、注 120) にて既出

132) O. P. Kejariwal, op. cit., p. 81 A.S., Part II, pp. 2-3 ゴールデンガムは、論文 "Some account of the Sculptures at Mahabalipoorom, usually called the Seven Pagodas", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. IV, no. IV, 1795, pp. 69-80 を寄稿し、「マハーバリラムの寺院群」にある、碑文について報告した。アジア協会はこれを、「古代遺物」の、さらに 2 つの小項目「彫刻」と「碑文」とに分類している (A.S., Part II, pp. i-xxxiv)。

133) J. G.

134) 『世界美術大鑑』小学館、第 14 巻、1999 年、17-19 頁、21 頁、41-44 頁、53-54 頁、350-351 頁

135) A.S., Part II, pp. i-xxxiv

136) Jan Huygen van Linschoten, *Itinerario*, Amsterdam, 1596

137) Patrick Conner, *Oriental Architecture in the West*, London, 1979, p. 113

138) 会誌『アジア研究』の最初の出版地は、カルカッタである。その第 4 巻 (1795) にある「ゴールデンガムの論文」には、「エレファンタ第 1 窟」の平面図は掲載されていない。ただし論文には、石窟の長さとは幅は 135 feet であり、「A plan accompanies this account (J.G., p. 413, 1. 13)」と記されている。ところが、ロンドンで再出版された会誌 (vol. I-XI, 1801-12) の第 4 巻 (1807) には、384 頁 (第 26 号論文の最後の頁) と 385 頁 (第 27 号論文の最初の頁) とのあいだに、頁数が記されていない紙面がある。この紙面に、本来「ゴールデンガムの論文」に掲載されるべき「エレファンタ第 1 窟」の平面図が載っている。139) ハルヘッド (Nathaniel Brassey Halhed, 1751-1830, 東インド会社の社員、サンスクリット学者) は、ベンガル駐留中に、「プラーナ (Purana)」のペルシア語訳文献を英訳し、「プラーナ・サプレカサ、すなわちプラーナの解説 (The Puranarthaprecasa, or the Puranas Explained)」(1776) として著わした (P. J. Marshall, *The British Discovery of Hinduism in the Eighteenth Century*, Cambridge, 1970, p. 268 footnote b)。

140) J.G., p. 415, 1. 13-2

141) J.G., p. 417, 1. 7-8

142) J.G., p. 417, 1. 8-11

143) Sir William Jones, "On the Chronology of the Hindus", *The Asiatic Researches*, The Asiatic Society, vol. II, no. VII, 1790, p. 147 にある「A Chronological Table」には、紀元 79 (=1788-1709) 年に「Saca」と記されている。「Saca」は、現在でいう「シャカ族」のことである (山崎元一『世界の歴史 3 (古代インドの文明と歴史)』中央公論社、1997 年、183-186 頁)。

144) To deduce the era of the fabrication of this structure is not so easy a task, but it was no doubt posterior to the great schism in the Hindu religion, which according to the Puranas, I learn, happened at a period coeval with our date of the creation; be this as it may, we have accounts of powerful princes, who ruled this part of the country of a later date, particularly of one who usurped the government in the nineteenth year of the Christian era famed for a passion for architecture, many worse hypothesis have been, than one which might be formed, of his having founded the cave, but I am led to imagine no certain conclusions on this dark subject could be drawn from the sources of information open at present. (J.G., p. 417, 1. 12-21)

145) 18 世紀後期のアジア協会では、古代ギリシアの歴史家 Justin による記録から、アレクサンダー大王によるインド遠征以降の紀元前 300 年代のインドの王座にかんする情報を得ていた (A.S., Part I, pp. 86-87)。

146) Various have been, and are to this day, the conjectures respecting the Elephanta cave. Those who attempt to deduce its origin from the Egyptians, from the Jews, or from Alexander the great, appear to me, with due deference, to give themselves much unnecessary trouble, which I shall further endeavour to shew as briefly as the subject will admit of, though at the same time it must be observed that resembling features are not wanting in the case of the Egyptians, and of the Jews, to lead towards such deductions, but these resemblances strike me as tending to the elucidation of a more interesting hypothesis, viz. that the systems of those people were copies of an original found in this part of the world. (J.G., p. 415, 1. 3-12)

147) アジア協会では毎週 1 回会合が開かれていたが、ジョーンズの死後、会合の回数も参加者数も激減した。1800 年には、年に 9 回しか開かれることはなかったし、1 回の参加者数も 9 人を越えることはなかった。しかし、第 4 代会長コルブルック (Henry Thomas Colebrooke, 1765-1837, 在任 1807-14, サンスクリット学者) は、協会の活動を復興させ、ジョーンズによるサンスクリット古典籍の研究を継承した (長田俊樹『新インド学』角川書店、2002 年、28 頁、34-36 頁)。

148) A.S., Part II, pp. i-iv

(2003 年 7 月 10 日原稿受理、2004 年 1 月 7 日採用決定)